

被害者は加害者をいかに認知するか

－ 2つの謝罪情報の処理に着目して－

芝崎 美和¹⁾*・芝崎 良典²⁾

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科 2) 四国大学

(2020年11月18日受理)

本研究の目的は、過去の謝罪情報と現在の謝罪情報といった2つの情報に基づき、加害者についての認知がいかに形成されるかを明らかにすることであった。分析の結果、加害者の認知には、第1に現在の謝罪情報に基づいた認知の形成がなされ、第2に現在の違反で謝罪しなかった加害者に関しては過去の謝罪情報を考慮しつつ認知が形成されるというように、段階的な認知形成が行われることが明らかになった。また、類似場面での謝罪予測に関しては、過去と現在の2つの謝罪情報を考慮し、2つの情報に矛盾がなく、両時制においても謝罪していた加害者については、類似場面での謝罪が高く予測され、反対にともに謝罪しなかった加害者については類似場面での謝罪が予測されなかった。他方、2つの情報に矛盾がある場合は、現在の謝罪情報、過去の謝罪情報の順に優先処理を行い、類似場面での加害者の謝罪について予測することが示された。

(キーワード) 謝罪、情報処理、認知形成

1. 問題と目的

対人葛藤場面において、謝罪は多用される方略の1つである^{1) 2)}。例えば、幼児は、他児のおもちゃを取り上げるといった、自らに明らかな非が認められる場面では、補償行動や自己中心的方略よりも謝罪を多く選択する²⁾。同様の見解は、児童期や青年期においてもみられ、大学生を対象とした謝罪研究では、謝罪、弁明、正当化、拒否の中で、違反後に加害者が選択する割合が最も高いのは謝罪であることが明らかにされている¹⁾。

謝罪は罪悪感を伴うか否かによって、2つに大別される。罪悪感を伴う謝罪は誠実な謝罪という^{2) 3)}。違反後の罪悪感は、予期的罪悪感と結びつき、違反のくり返しを防ぐという効果も持つ⁴⁾。違反のくり返し防止という観点からも、罪悪感を伴う誠実な謝罪は望ましい謝罪であるといえる。

他方、罪悪感を伴わない謝罪は道具的謝罪とよばれる²⁾。保育者に叱られたくない、友達に嫌われたくない、といった、何らかの目的を達成するために行う謝罪であり²⁾、道具的謝罪は幼児期から見られる。対人葛藤場面での謝罪効果について検討した芝崎⁵⁾は、3歳児でも謝罪の際に、罰回避、印象悪化抑制、怒り緩和、許容といった効果を認識していること、また、効果を認識する程度には、被害児との親密性が強く関連することを示した。

児童期や青年期でも幼児期と同様に、罰回避や怒り緩和、許容に謝罪の効果は見られる^{6) 7) 8)}。さらに、謝罪の

効果の大きさは、違反や加害者についての情報によって異なり、被害が小さいときや、加害行為が意図的ではないとき、加害者に対して良い印象を被害者が持っていた場合は、謝罪のもたらす効果は大きくなる^{6) 7)}。

これら謝罪のもたらす効果の中でも、許容に注目したとき、影響因の1つとして、能力や特性についての信念があげられる。他者の能力や特性の安定性についての信念は、暗黙理論において説明される。暗黙理論では、「能力や特性は変わらず固定的である」という実体信念(entity belief)と、「能力や特性は変わりうる」という増加信念(incremental belief)の2つが扱われている⁹⁾。

実体信念を持つ人は、何かにチャレンジするときに、パフォーマンスが低下するリスクを持っており^{10) 11)}、困難に直面した際に、ネガティブな能力への帰属を行いがちである^{12) 13)}。反対に、増加信念を持つ人は、困難に直面したときのレジリエンスが高い¹²⁾。このような信念による差異は、他者の特性の捉えについても見られ、実体信念を持つ人は、違反を犯した他者についてネガティブな判断を示す傾向があるのに対し、増加信念を持つ人は、全体的に、他者についてネガティブな捉え方をしない^{14) 15)}。

これらの見解に基づき、謝罪受容に関する実体信念の効果について検討したのが大淵・山本・謝¹⁶⁾である。大淵ら¹⁶⁾は、調査対象者に2つの違反場面を提示し、加害者が謝罪した場合と違反行動を正当化した場合における許容の程度に、実体信念がいかに関係するかを検討した。その結果、謝罪した加害者を許容する程度は、実体信念の弱い者

*連絡先：芝崎美和 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

の方が高いことが明らかにされた。このことは、「特性は変わらない」という実体信念を持つ者よりも、「特性は変わりうる」という増加信念を持つ者の方が、違反事実を認めて謝罪した加害者を、行動改善の期待から許すことを意味している。

一方、こうした実体信念は、状況情報によって影響を受けることも明らかにされている。鈴木・岡・村本¹⁷⁾は、実体理論者は課題遂行の結果に基づき他者の能力を評価する際に、努力量という状況情報を考慮し、努力せずに成績が低下した場合や、努力の結果成績が向上した場合には、能力への原因帰属の程度が抑制されることを明らかにした。したがって、「能力や特性は変わらない」という実体信念を持つ者であっても、状況情報次第で、能力に原因帰属した遂行結果の解釈を行わない可能性が示された。これを謝罪に当てはめると、謝罪能力についての信念は、加害者の謝罪に関する既存あるいは新規情報によって影響を受ける可能性がある。

では、謝罪能力に関する実体信念は、どのように形成されるのであろうか。例えば、過去において謝罪したことのない加害者が、現在の違反場面で謝罪した場合としない場合とでは、被害者の怒りが緩和されたり、被害者が加害者を許容する程度は異なるのではないか。笹屋¹⁸⁾によると、他者の感情を理解しようとする際、幼児では表情情報を優先的に処理するが、年齢が高くなるにつれ、表情情報と状況情報を統合し、複合的判断を行うようになるという。このような情報の統合は、謝罪に関しても見られ、過去の謝罪情報と現在の謝罪情報という2つの情報が示された場合、成人は、それらを複合的に判断し、認知、行動を決定するのではなかろうか。そして、このような情報処理の個人差によって信念における個人差が生じる可能性がある。

以上のことから、本研究では、過去の謝罪情報と現在の謝罪情報といった2つの情報を、成人がどのように処理し、謝罪した加害者についての認知を形成するかについて検討を行う。また、これらの情報が信念の形成にいかに関わるかについての考察を行う。なお、複数の情報を統合する能力は男性よりも女性の方が高いことから¹⁸⁾、本研究では成人女性を対象とした検討を行うこととする。

2. 方法

対象者 青年期女子39名であった。

手続き 質問紙による一斉調査を行った。調査対象者1名につき、4課題(謝罪なし過去情報-謝罪あり現在情報(以下、謝罪なし-謝罪あり)、謝罪なし過去情報-謝罪なし現在情報(以下、謝罪なし-謝罪なし)、謝罪あり過去情報-謝罪なし現在情報(以下、謝罪あり-謝罪なし)、謝罪あり過去情報-謝罪あり現在情報(以下、謝罪あり-謝罪あり))を提示し

た。課題提示順序は調査対象者ごとにカウンターバランスがとられた。

課題文、教示文、質問文は以下の通りである。なお、課題文および質問文は、中川・山崎¹⁹⁾を参考に作成した。

課題文 謝罪なし-謝罪あり条件：「マミさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとしても、一度も謝ったことはありません。ある日、あなたはマミさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、マミさんは、約束の時間に遅れてやってきました。マミさんは、これまで一度も謝ったことがなかったのに、遅れてしまってごめんなさいとあなたに謝りました。」

謝罪なし-謝罪なし条件：「ユカさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとしても、一度も謝ったことはありません。ある日、あなたはユカさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、ユカさんは、約束の時間に遅れてやってきました。ユカさんは、これまで一度も謝ったことがなかったのですが、今日もあなたに謝りませんでした。」

謝罪あり-謝罪なし条件：「コトミさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとき、必ず謝ります。ある日、あなたはコトミさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、コトミさんは、約束の時間に遅れてやってきました。いつもは謝るのに、今日は謝りませんでした。」

謝罪あり-謝罪あり条件：「ミホさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとき、必ず謝ります。ある日、あなたはミホさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、ミホさんは、約束の時間に遅れてやってきました。ミホさんは、いつものように今日も、遅れてごめんなさいとあなたに謝りました。」

課題文を提示した後、(a) ポジティブ印象(あなたは、コトミさんに対して、どの程度ポジティブな印象を持ちましたか。)、(b) ネガティブ印象(あなたは、コトミさんに対して、どの程度ネガティブな印象を持ちましたか。))を7段階評定(まったくポジティブ/ネガティブな印象持たない(1点)～非常にポジティブ/ネガティブな印象を持つ(7点))で求め、ポジティブ印象得点とネガティブ印象得点を算出した。続いて、(c) 怒り(あなたは、コトミさんにどの程度怒っていますか?)について7段階評定(まったく怒っていない(1点)～非常に怒っている(7点))で尋ね、怒り得点を算出した。最後に、(d) 罪悪感予測(あなたはコトミさんが罪悪感を持っていると思いますか?)、(e) 許容(あなたはコトミさんのことを許そうと思っていますか?)、(f) 再犯予測(コトミさんは、次に遊ぶと時、遅刻すると思いますか?)、(g) 謝罪予測(次に遅刻した

とき、コトミさんはあなたに謝ると思いますか?)を7段階評定(まったく思わない(1点)～非常に思う(7点))で求め、それぞれ罪悪感予測得点、許容得点、再犯予測得点、謝罪予測得点を算出した。

倫理的配慮 調査は一斉方式で実施された。調査にあたり、回答は任意であること、回答したくない項目には回答しなくてよいこと、成績とは無関係であること、無記名調査であるため個人の回答は開示されず、特定されないことを調査紙面で記載説明するとともに、口頭で説明した。質問紙への回答をもって、本研究への協力の許諾と判断した。

3. 結果

1) 謝罪情報が印象に及ぼす影響

過去と現在の謝罪情報によって、2つの印象得点が異なるか否かについて、1要因の分散分析を実施した。ポジティブ印象に関しては、得点の差異が有意であったため($F(3, 114) = 33.59, p < .01$)、ボンフェローニ法による多重比較を実施したところ、謝罪なし-謝罪なし条件よりも謝罪あり-謝罪なし条件の得点が有意に高く、謝罪あり-謝罪なし条件よりも謝罪なし-謝罪あり条件、謝罪あり-謝罪あり条件の得点が有意に高かった。

ネガティブ印象に関しても、有意な得点差が見られたため($F(3, 114) = 22.37, p < .01$)、ボンフェローニ法による多重比較を行った。その結果、謝罪なし-謝罪あり条件、謝罪あり-謝罪あり条件よりも、謝罪なし-謝罪なし条件と謝罪あり-謝罪なし条件の得点が有意に高かった。これらのことから、青年は加害者の印象を決定する際、過去の謝罪情報ではなく、現在の謝罪情報を手がかりにすることが示された。

2) 謝罪情報と謝罪効果の関連性

怒り得点を逆転させたものを怒り緩和得点とし、怒り緩和得点、罪悪感予測得点、許容得点が謝罪情報によってどのように異なるかを明らかにするために、1要因の分散分析を実施した。分析の結果、怒り緩和得点($F(3, 114) = 22.58, p < .01$)、罪悪感予測得点($F(3, 114) = 57.31, p < .01$)、許容得点($F(3, 114) = 35.99, p < .01$)のいずれについても有意な得点差が見られたため、ボンフェローニ法

による多重比較を行ったところ、いずれにおいても、謝罪なし-謝罪なし条件よりも謝罪あり-謝罪なし条件、謝罪あり-謝罪なし条件よりも謝罪なし-謝罪あり条件と謝罪あり-謝罪あり条件の得点が有意に高いことが示された。

3) 類似場面での行動予測に謝罪情報が及ぼす影響

まず、再犯予測得点について謝罪情報との関連性をみるために、1要因の分散分析を実施した。その結果、有意な得点差がみられたため、ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、謝罪なし-謝罪なし得点が、他の3条件の得点よりも有意に高かった($F(3, 114) = 23.85, p < .01$)。

続いて、謝罪予測得点についても、謝罪情報に関する1要因の分散分析を行ったところ、条件による得点差が有意であった($F(3, 114) = 108.25, p < .01$)。そのため、ボンフェローニ法による多重比較を実施した結果、謝罪あり-謝罪あり条件、謝罪なし-謝罪あり条件、謝罪あり-謝罪なし条件、謝罪なし-謝罪なし条件の順に得点が高いことが明らかになった。

4) 各得点の関係性

加害者の認知に関する項目間の関連性を明らかにするために、条件別にピアソンの積率相関係数の検定を行った。結果をTable 2～5に示す。ここでは、やや強い相関関係($r = .40$ 以上)がみられたものを中心に考察を行う。

(1) 謝罪なし-謝罪あり条件

ポジティブ印象得点は、ネガティブ印象得点との間で負の相関が($r = -.61, p < .01$)、怒り得点($r = .42, p < .01$)との間で正の相関が見られた。ネガティブ印象得点に関しては、怒り緩和得点($r = -.80, p < .01$)、罪悪感予測得点($r = -.53, p < .01$)、許容得点($r = -.63, p < .01$)との間で負の相関がみられた。怒り緩和得点は罪悪感予測得点($r = .43, p < .01$)と許容得点($r = .54, p < .01$)との間で正の相関を示し、罪悪感予測得点は許容得点と正の相関を示した($r = .48, p < .01$)。

(2) 謝罪なし-謝罪なし条件

謝罪あり-謝罪あり条件と同様に、ポジティブ印象得点はネガティブ印象得点($r = -.73, p < .01$)との間で負の相関を、怒り緩和得点($r = .44, p < .01$)との間で正の相関を示した。ネガティブ印象得点は、怒り緩和得点と($r = -.49, p < .01$)、罪悪感予測得点との間で負の相関($r = -.47, p < .01$)

Table 1 各項目における平均値(標準偏差)と分散分析結果

	謝罪なし-謝罪あり条件	謝罪なし-謝罪なし条件	謝罪あり-謝罪なし条件	謝罪あり-謝罪あり条件	F 値
1. ポジティブ印象得点	5.26(1.31)	1.97(1.37)	3.21(1.51)	4.46(1.90)	33.59**
2. ネガティブ印象得点	3.03(1.46)	5.74(1.62)	4.77(1.40)	3.56(1.93)	22.37**
3. 怒り得点	5.05(1.38)	2.92(1.56)	4.00(1.59)	4.97(1.68)	22.58**
4. 罪悪感予測得点	5.62(1.37)	2.00(1.47)	3.33(1.49)	5.23(1.65)	57.31**
5. 許容得点	6.00(.89)	3.33(1.51)	4.59(1.52)	5.62(1.66)	35.99**
6. 再犯予測得点	3.49(1.27)	5.87(1.28)	4.15(1.53)	4.08(1.81)	23.85**
7. 謝罪予測得点	4.77(1.22)	1.56(.99)	3.95(1.41)	6.41(1.21)	108.25**

** $p < .01$

Table 2 項目間の関連性 (謝罪なし—謝罪あり条件)

	1	2	3	4	5	6	7
1. ポジティブ印象得点	-						
2. ネガティブ印象得点	-.61**	-					
3. 怒り緩和得点	.42**	-.80**	-				
4. 罪悪感予測得点	.39*	-.53**	.43**	-			
5. 許容得点	.36*	-.63**	.54**	.48**	-		
6. 再犯予測得点	-.09	.19	-.21	-.15	-.23	-	
7. 謝罪予測得点	.10	-.14	.18	.02	.27	-.23	-

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 項目間の関連性 (謝罪なし—謝罪なし条件)

	1	2	3	4	5	6	7
1. ポジティブ印象得点	-						
2. ネガティブ印象得点	-.73**	-					
3. 怒り緩和得点	.44**	-.49**	-				
4. 罪悪感予測得点	.31	-.47**	.18	-			
5. 許容得点	.27	-.14	.29	.47**	-		
6. 再犯予測得点	-.27	.16	-.39*	-.35*	-.32*	-	
7. 謝罪予測得点	.24	-.12	.18	.61**	.40*	-.62**	-

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4 項目間の関連性 (謝罪あり—謝罪なし条件)

	1	2	3	4	5	6	7
1. ポジティブ印象得点	-						
2. ネガティブ印象得点	-.86**	-					
3. 怒り緩和得点	.53**	-.67**	-				
4. 罪悪感予測得点	.39*	-.44**	.48**	-			
5. 許容得点	.36*	-.44**	.65**	.61**	-		
6. 再犯予測得点	-.41**	.45**	-.36*	-.47**	-.50**	-	
7. 謝罪予測得点	.47**	-.54**	.47**	.58**	.51**	-.67**	-

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 5 項目間の関連性 (謝罪あり—謝罪あり条件)

	1	2	3	4	5	6	7
1. ポジティブ印象得点	-						
2. ネガティブ印象得点	-.50**	-					
3. 怒り緩和得点	.56**	-.34*	-				
4. 罪悪感予測得点	.46**	-.12	.54**	-			
5. 許容得点	.38*	-.06	.65**	.59**	-		
6. 再犯予測得点	-.35*	.64**	-.29	-.25	-.01	-	
7. 謝罪予測得点	.37*	.28	.42**	.51**	.55**	.35*	-

** $p < .01$, * $p < .05$

.01)を示した。さらに、罪悪感予測得点と、許容得点 ($r = .47, p < .01$)、謝罪予測得点 ($r = .61, p < .01$)との間には有意な正の相関が見られ、再犯予測得点と謝罪予測得点との間には負の相関 ($r = -.62, p < .01$)が確認された。

(3) 謝罪あり—謝罪なし条件

ポジティブ印象得点は、ネガティブ印象得点 ($r = -.86, p < .01$)、再犯予測得点 ($r = -.41, p < .01$)との間で負の相関を示し、怒り緩和得点 ($r = .53, p < .01$)、謝罪予測得点との間で正の相関を示した ($r = .47, p < .01$)。ネガティブ印象得点は、再犯予測得点 ($r = .45, p < .01$)との間で正の相関を、怒り緩和得点 ($r = -.67, p < .01$)と罪悪感予測得点 ($r = -.44, p < .01$)、許容得点 ($r = -.44, p < .01$)、謝罪予測得点 ($r = -.54, p < .01$)との間で負の相関を示した。さらに、怒り緩和得点は罪悪感得点 ($r = .48, p < .01$)、許容得点 ($r = .65, p < .01$)、謝罪予測得点 ($r = .47, p < .01$)との間で正の相関を示し、罪悪感予測得点は許容得点 ($r = .61, p < .01$)と謝罪予測得点 ($r = .58, p < .01$)との間では正の相関を、再犯予測得点との間では負の相関 ($r = -.47, p < .01$)を示した。許容得点に関しては、謝罪予測得点とは正の相関 ($r = .51, p < .01$)を、再犯予測得点とは負の相関 ($r = -.50, p < .01$)を示した。また、再犯予測得点と謝罪予測得点との間には負の相関 ($r = -.67, p < .01$)が確認された。

(4) 謝罪あり—謝罪あり条件

ポジティブ印象得点は、ネガティブ印象得点との間では負の相関 ($r = -.50, p < .01$)を、怒り緩和得点 ($r = .56, p < .01$)と罪悪感予測得点 ($r = .46, p < .01$)との間では正の相関を示した。ネガティブ印象得点については、再犯予測得点 ($r = .64, p < .01$)との間でのみ正の相関が見られた。また、怒り緩和得点は罪悪感得点 ($r = .54, p < .01$)、

許容得点 ($r = .65, p < .01$)、謝罪予測得点 ($r = .42, p < .01$)との間で正の相関を示した。罪悪感得点については、許容得点 ($r = .59, p < .01$)、謝罪予測得点 ($r = .51, p < .01$)との間で正の相関が確認された。さらに、許容得点と謝罪予測得点との間には正の相関が見られた ($r = .55, p < .01$)。

4. 考察

本研究の目的は、過去の謝罪情報と現在の謝罪情報といった2つの情報を、成人がどのように処理し、謝罪した加害者についての認知を形成するかについて明らかにすることであった。

1) 被害者に対する加害者の認知に2つの謝罪情報が及ぼす影響

(1) 加害者の印象形成

分析の結果、加害者の特性については、特に現在の謝罪情報の影響力が強く、過去に謝罪したか否かによらず、直前の違反場面において謝罪しなかった加害者よりも謝罪した加害者に対して、ポジティブな印象が形成されやすく、ネガティブな印象が形成されにくいことが明らかになった。また、直前の違反場面において謝罪しなかった加害者に対するポジティブ印象形成には過去の謝罪情報が影響し、過去に謝罪した加害者に対してよりポジティブな印象が形成された。

他者の感情を推測する際、2つの矛盾した情報が提示されたとき、どちらか一方の情報を無視するのではなく、2つの情報の矛盾を解消するように説明づける統合型の割合は、年齢に伴って高くなり、成人女性に限定すると、ほぼすべての者が統合型に位置づけられる¹⁸⁾。しかしながら、謝罪した加害者の印象形成に関しては、2つの情報を統合

するというよりは、現在の謝罪情報を優先的に処理することが確認された。一方、謝罪しなかった加害者に関しては、ポジティブな印象を判断する際に過去の謝罪情報を用いていた。このことから、成人は、過去と現在の2つの謝罪情報が提示された場合、まず、現在の謝罪情報に基づいた判断を行い、現在の違反に対して謝罪しない加害者に対しては、過去の謝罪情報から判断を行うというように、段階的な判断を行うことが明らかになった。

また、加害者の認知に関する項目間の関連性を検討した結果、特にネガティブ印象に関しては、いずれの条件でも怒り緩和との間で負の関連性が確認された。このような結果は、怒り緩和と印象悪化抑制が関連するという、幼児についての芝崎⁵⁾の見解が、成人においても当てはまることを意味している。つまり、過去と現在の2つの謝罪情報から加害者の印象を決定する際には、怒り感情がいかに緩和されるかが重要であるといえる。

(2) 怒り緩和、罪悪感予測、許容

怒り、罪悪感予測と許容についても、現在の謝罪情報が強く影響し、過去に謝罪したか否かによらず、現在の違反において謝罪した加害者については、怒りが緩和されやすく、罪悪感を認識していると判断し、許容を選択することが分かった。また、印象判断と同様に、現在の違反において謝罪しない加害者に対しては、過去の謝罪情報を手がかりとし、過去においても謝罪しなかった者については、怒りが緩和されず、罪悪感の認識も予測されにくく、許容が得られにくいことが明らかになった。

罪悪感には、違反についての責任認識と行動改善の意志を被害者に伝達する役割や²⁰⁾、ダメージを受けた人間関係の修復を図る役割がある²¹⁾。項目間の関連性分析した結果、いずれの条件においても、罪悪感と許容と正の相関を示していたことから、2つの謝罪情報に基づき、加害者の罪悪感をどの程度予測できるかが、加害者を許容する要件となるといえる。

(3) 再犯予測、謝罪予測

再犯予測に関しては、謝罪なし-謝罪なし条件における得点が他の3条件の得点よりも有意に高かったことから、過去と現在のいずれの違反においても謝罪しないという条件が揃った場合は、被害者は加害者の再犯を予測しやすいといえる。

一方、謝罪予測に関しては、条件による違いが顕著であり、謝罪あり-謝罪あり条件、謝罪なし-謝罪あり条件、謝罪あり-謝罪なし条件、謝罪なし-謝罪なし条件の順で得点が高かった。つまり、類似場面での加害者の謝罪を予測する際、まずは過去と現在の2つの謝罪情報を考慮し、2つの情報に矛盾がなく、両時制においてともに謝罪していた加害者については、次も謝罪するだろうと予測し、ともに謝罪しなかった加害者については、次も謝罪しないだろうと予測する。他方、2つの情報に矛盾がある場合は、現

在の謝罪情報、過去の謝罪情報の順に優先処理を行い、類似場面での加害者の謝罪について予測することが示された。

2) 暗黙理論と謝罪

謝罪予測に関するこれらの結果から、謝罪能力について暗黙理論からの考察を行う。暗黙理論では、「能力や特性は変わらず固定的である」という実体信念 (entity belief) と、「能力や特性は変わりうる」という増加信念 (incremental belief) が扱われており、謝罪に関しては、謝罪した加害者を許容する程度は、実体信念の弱い者の方が高いことが明らかにされている¹⁶⁾。しかしながら、謝罪能力に関する実体信念が、いかに形成されるかについては十分に議論されているとはいえない。

本研究結果から、過去と現在という2つの時制において、ともに謝罪する、もしくは謝罪しないという一貫した謝罪情報を持つ加害者に関しては、その情報に基づいて類似場面での謝罪の有無が予測されることが示された。これはすなわち、一貫した複数の謝罪情報によって、謝罪能力に関する実体信念が形成されることを意味している。

一方、2つの謝罪情報が矛盾する場合は、現在の謝罪情報、過去の謝罪情報の順に優先処理が行われるが、いずれかのみが情報が謝罪能力についての実体信念の形成に結びつくことはないといえよう。つまり、矛盾した謝罪情報を処理することは、謝罪能力に関する増加信念の形成に貢献すると考えられる。

対人葛藤解決には謝罪が有効であるとされているが¹⁾ 2)、常に謝罪を選択する者は少ない。しかしながら一方で、他者について「いつも謝らない」といった固定的な印象を持つ者もいる。増加信念を持つ者は、全体的に、他者についてネガティブな捉え方をせず^{14) 15)}、また、困難に直面した際のレジリエンスが高い¹²⁾。謝罪能力に関する増加信念を形成し、対人葛藤を柔軟に乗り切るためには、加害者の謝罪に関する複数の情報を想起し、処理することが重要であり、そうすることが、対人関係や他者についてのポジティブな捉えを生じさせると考えられる。

今後の課題

本研究では、複数の情報の統合により長けている¹⁸⁾ 成人女性を対象に調査を行ったが、加害者の認知に性差がどのように影響するかについて検討する必要がある。また、暗黙理論が加害者の認知にどのように関わるかについても、詳細に検討しなければならない。

文献

- 1) Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J., & Wetter, D. W. (1990). Pardon my gaffe: Effects of sex,

- status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 610-621.
- 2) 中川美和・山崎晃. (2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. *教育心理学研究*, 52, 159-169.
- 3) 中川美和・山崎晃. (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. *発達心理学研究*, 16, 165-174.
- 4) Hoffman, M. L. 1998 Varieties of empathy-based guilt. In J. Bybee (Ed.), *Guilt and Children*. (pp.91-112) San Diego: Academic Press.
- 5) 芝崎美和. (2008). 親密性が幼児の謝罪効果の認識に与える影響. *幼年教育研究年報*, 30, 41-48.
- 6) Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982). Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- 7) Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1989). Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- 8) Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- 9) Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-1048.
- 10) Henderson, V. L., & Dweck, C. S. (1990). Motivation and achievement. In S. S. Feldman & G. R. Elliot (Eds.), *At the threshold: The developing adolescent* (pp. 308-329). Cambridge: Harvard University Press.
- 11) Wood, R., & Bandura, A. (1989). Impact of conceptions of ability on self-regulatory mechanisms and complex decision making. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 407-415.
- 12) Cain, K. M., & Dweck, C. S. (1995). The relation between motivational patterns and achievement cognitions through the elementary school years. *Merrill-Palmer Quarterly*, 41, 25-52.
- 13) Henderson, V. L., & Dweck, C. S. (1990). Motivation and achievement. In S. S. Feldman & G. R. Elliot (Eds.), *At the threshold: The developing adolescent* (pp. 308-329). Cambridge: Harvard University Press.
- 14) Erdley, C. A., & Dweck, C. S. (1993). Children's implicit personality theories as predictors of their social judgments. *Child Development*, 64, 863-878.
- 15) Dweck, C. S., Chiu, C., & Hong, Y. (1995). Implicit theories and their role in judgments and reactions: A world from two perspectives. *Psychological Inquiry*, 6, 267-285.
- 16) 大淵憲一・山本雄大・謝曉静. (2016). 謝罪受容に対するパーソナリティ要因の検討：実体信念と寛容性の効果. *放送大学研究年報*, 34, 87-92.
- 17) 鈴木啓太・岡蒼透・村本由紀子. (2018). 実体理論者が努力を重視するとき：他者の能力評価における評価者の暗黙理論と努力情報の効果. *人間環境学研究*, 16, 83-88.
- 18) 笹屋里絵. (1997). 表情および状況手掛りからの他者感情推測. *教育心理学研究*, 45, 312-319.
- 19) 芝崎美和. (2013). 謝罪に関する過去情報が児童による他者の内的特性理解に与える影響. *日本発達心理学会第24回大会発表論文集*, 623.
- 20) Lindsay-Hartz, J. (1984). Contrasting experiences of shame and guilt. *American Behavioral Scientist*, 27, 689-704.
- 21) Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, 115, 243-267.